『折り鶴』自選十五句

栗原公子

春光や縒りて艶ます刺繍糸

桜咲き満つ寂しさの倍になる

繰る辞書の紙の薄さよ新樹の夜

ドロップのごと子ら駆ける五月の野

風に髪あづけ少女は五月の木

山滴る人に会はねば言葉痩せ

万緑や戻れぬ道は振り向かず

折り鶴を開けば四角ひろしま忌

香水一滴あともどりもうできず

指栞して初秋の風を聴く

桃は種人は命を深く抱き

青蜜柑言っておかねばならぬこと

秋惜しむ頁の角を小さく折り

瓢の笛諦めてより鳴り始む

風爽かまだ濡れてゐる草木染